

巻頭言

名古屋大学大学院医学系研究科

野 野 一平

研究における倫理について考えてみました

理学療法における科学的根拠の重要性は増すばかりである。大学院進学が特に珍しいことではなくなった現在、理学療法に関する研究領域は広がると共に、質も向上が目覚ましい。そこで偶々先日、筆者の研究計画が倫理委員会を通過したというタイミングでもあり、一度立ち止まり倫理的な観点から研究というものを見つめ直してみたい。

筆者の研究領域は一応神経科学分野である。この領域において、近年ニューロエシックスという言葉が俄かに注目を集めている。これは脳科学の研究と応用技術に特化した生命倫理の新語であり、技術革新に伴い新たに様々な問題が提起されてきている。脳画像イメージングとは文字通り脳を画像化することだが、脳の情報を解読することを目的としている。そしてこの技術は、人格や微妙な心的変化を客観視できるように思われている。脳画像イメージングによる道徳哲学実験として、「暴走トロリー」と「ファットマン」という道徳的ジレンマの代表的な研究がある。詳細は原著に譲るが、従来は哲学の領域で考察されていた自由意志や自己統制、意図あるいは道徳や倫理を、脳機能という側面から科学的に研究するアプローチが可能となってきている。そして、イメージングの技術が差別やスティグマにつながるということが懸念されている。

一方、心の中で考えた通りに操作できるブレインマシンインターフェイス (BMI) のような機器や義肢の開発にも脳科学が深く関与している。BMIとはヒト脳の情報を解読して双方向通信することを目指す技術である。脳と機械を連結する技術としては、神経調節と神経補綴に分類され、前者はパーキンソン病治療に使われる深部刺激療法が挙げられる。後者は、義肢装具などの開発によって理学療法に密接に関係してくると考えられるが、信号を直接患者から取り出すため、その情報の取り扱いには十分な注意が必要である。また競技分野などにおいて、健康なヒトが脳科学技術を用いて自身の精神身体機能を増強(エンハンスメント)させた場合の倫理的問題も、今後十分に協議されるべき問題である。

脳科学と理学療法は研究の相性が良く、今後更に積極的に関わっていくべき分野であると考えられる。その一方、上述のような倫理的問題を含んでいることも事実であり、理学療法研究の末席を汚させて頂いている身として、本稿により倫理というものの必要性を少しでも認識して頂ければ幸いである。